



上智大学名誉教授
渡部昇一
わたなべ・しょういち 昭和5年山形県生まれ。30年上智大学文学部大学院修士課程修了。ドイツ・ミュンヘン大学、イギリス・オックスフォード大学留学。Dr phil. Dr phil. h. c. 平成13年から上智大学名誉教授。幅広い評論活動を展開する。著書は専門書のほかに『歴史に学ぶリーダーシップ』『日本を変えよう』『東京裁判を裁判する』『時流を読む眼力』（いずれも致知出版社刊）など多数。

『ローマ人の物語』に学ぶ 将の条件

二〇〇六年十二月、作家・塩野七生さんが十五年にわたって執筆してきた『ローマ人の物語』が完結した。古代ローマの起源から帝政ローマの滅亡までを描いたこの作品は、多くの日本人の心を捉え、特に政財界のリーダーたちにファンが多いことも知られる。なぜローマ帝国は民族や文化、宗教の壁を超え、統一国家として繁栄を築くことができたのか。そこにはどんなリーダーがいたのだろうか。上智大学名誉教授の渡部昇一氏とともに語り合っていた。



作家
塩野七生
しおの・ななみ 昭和12年東京都生まれ。37年学習院大学文学部哲学科卒業。翌38年からフィレンツェに留学し、ルネサンスを専攻。43年帰国後、『ルネサンスの女たち』（中公文庫刊）『チェザレ・ボルジアあるいは優雅なる冷酷』（新潮社刊）を出版。45年第24回毎日出版文化賞受賞。55年再びイタリアに渡り、以後、ローマに暮らしながらイタリアを舞台にした歴史作品を執筆。平成4年より代表作『ローマ人の物語』（新潮社刊）の執筆に取り組み、1年に1作のペースで発表。18年『ローマ世界の終焉』で全15巻が完結。平成17年紫綬褒章受賞。19年文化功労賞受賞。その他著作や受賞歴多数。

●対談——塩野七生&渡部昇一

ローマの歴史を
物語り続けて

塩野 きょうは久しぶりに渡部先生とおしゃべりできると思って楽しみにしてきたんです。ただ、長年二千年以上前の人たちとばかり付き合ってきたから、生きている人とお付き合いするのが下手になっちゃって、うまく話せるかどうか心配ですが（笑）。

渡部 まずはこのたび文化功労賞の受賞、おめでとうございます。そして十五年にわたって刊行し続けた『ローマ人の物語』完結、お疲れ様でした。

実は平成十八年は『源氏物語』ができてからちょうど千年とされる年でした。世界で初めて長編小説を書いたのが紫式部という日本人女性で、その千年後にローマ帝国の通史を書いたのが

これまた日本人女性であると。私は『ローマ人の物語』をすべて読破していますが、本当におもしろかったです。

塩野 息子は「ママはクールなローマ人を書いたんだね」と言いました。「クール」とは非常に平たい日本語に訳すと「かっこいい」になると思います。ローマ帝国というと、いままでずっと悪者の連続のように描かれてきたこ

ろがありますから。
渡部 まあ、ともに死んだ皇帝がほとんどいませんからね。

塩野 当時は選挙もなかったし、ロールが起こせないから、殺すしかなかった。だから「殺されたから悪い皇帝だった」とは言い切れないと私は思っています。
日本が開国した時、すでにヨーロッパ